慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	チャールズR・ ヘンダーソン著「ボランタリー・ アソシエーションの場と機能」
Sub Title	
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2004
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.59 (2004.) ,p.81- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	解題
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000059-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

【解題】 チャールズ R. ヘンダーソン著「ボランタリー・アソシエーションの場と機能」

著者のチャールズ・リッチモンド・ヘンダーソン (Charles Richmond Henderson) は 1848 年にインディアナ州のコンヴィングトンに生まれ，1911 年にサウスカロライナ州のチャースルトンで亡くなっている。ヘンダーソンはシカゴ大学社会学部の創立期の 1892 年以来のメンバーである。かれは学部長のスモール (Albion W. Small)，トーマス (William I. Thomas)，ヴィンセント (George Vincent) とともに，シカゴ大学社会学部を支えたビック・フォーと賞賛されている。ビック・フォーの言葉は，シカゴ大学社会学部の神話語となっている。ヘンダーソンはシカゴ大学で，最初に「農村社会学」を講義したばかりでなく，最初に「都市社会学」の講義をしたことでも知られている。

ところが，スモールやトーマスに比して，ヴィンセントやヘンダーソンの影は薄い。ヴィンセントについては最近，ロマーノの『忘れられた社会学者再考』(Romano, Mary Ann (ed.), *Lost Sociologists Rediscovered*, The Edwin Mellen Press, 2002) のなかで，J. アダムス，W. ベンヤミン，B. ウェブ，W. D. ボアス，P. A. ソロキン，H. マーチノー，F. トリスタンなどとともに，とりあげられている。しかしヘンダーソンは，そうした機会さえもっていない。

シカゴ大学社会学部の歴史を書いたファリス (R. E. L. Faris, Jr.) は『シカゴ・社会学：1920〜1932』のなかで，ヘンダーソンについて，かれは社会学史に残る業績は何一つ残さなかったと，きびしい評価を与えている。ファリスはさらに，ヘンダーソンがシカゴ大学創立当初のメンバーで，唯一アメリカ社会学協会の会長に選ばれなかったことを指摘する。ファリスは父親がシカゴ大学の社会学部で学部の行政に深くかかわり，社会学協会の会長にも選ばれていることから，この評価には慎重でなければならないにしても，ヘンダーソンの学問的業績に対して，シカゴ学派の内部から強い疑問が呈されていることは，注目に値するだろう。ただ，そのファリスでも，ヘンダーソンが学生や大学院生を積極的にフィールドに現場に送り込み研究を進めるよう指導したことに関しては，評価せざるをえなかった。ヘンダーソンはシカゴ社会学の大きな特徴となっている調査に基づく研究を確立するのに不可欠な貢献をしている。かれの都市や農村への関心には，こうした研究態度が貫かれている。

最近，ボランティアの研究がブームの観を呈している。こうしたなかで，しばしばボランティアの研究が，社会学のまったく新しい分野であるかの説明がなされたりしている。しかし 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのアメリカの社会学には，ボランティアへの関心が深く刻まれていたのである。それどころか，ボランタリーな組織の存在はアメリカ社会の特徴ともなっていたのである。それを正面から最初に論じたのが，本論文の冒頭でも掲げられている A. トックビルの有名な「アメリカの民主政治」である。{A. de Tocqueville, *Democracy in America*, 1841（井伊玄太郎訳『アメリカの民主政治』講談社学術文庫 1972 年)}。

その後，ボランタリーな組織の存在をアメリカ社会の特徴として指摘した著名な社会学者が，M. ウェーバーである。かれは 1904 年に，アメリカを旅行している。そこで M. ウェーバーは，アメリカ人がおびただしい数のボランタリーな組織のなかで生活していることに驚いている。かれは帰国後の 1905 年に，有名な「プロテスタンティズムの〈倫理〉と資本主義の精神」を書きあげる。(Max Weber, Die protestantischen Ethik und der Geist des Kapitalismus, in *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen 1922 {大塚久雄訳『プロテスタンティズムの〈倫理〉と資本主義の精神』})。M. ウェーバーはその翌年の 1906 年に，アメリカでの体験を「プロテス

タンティズムの〈教派〉と資本主義の精神」としてまとめている。{Max Weber, Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus, in *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen 1922 (中村貞二訳「プロテスタンティズムの教派と資本主義の精神」『ウェーバー宗教社会学論集』河出書房 1968 年)}。しかしその後，ボランティアの研究が社会学のなかで，大きな比重を占めることはなかった。

本論文は世界で最初の社会学に関する学術雑誌が『アメリカ社会学雑誌』だとすると，ボランティアについて書かれた最初の論文だということとなる。ヘンダーソンはもともと牧師であり，人道主義の立場から社会学を研究した。かれは社会改良を目的としたのである。かれのボランティアへの着目も，そうした観点からであった。このため社会学の「科学」化を課題とした後の研究者からは，魅力のない研究対象となった。ボランティアの研究は実践的な問題と密接に関係する一方で，科学的な法則や抽象的な議論とはなじみにくい性格をもっている。このためボランティアの研究は次第に社会学の隅に追いやられるとともに，社会学と社会福祉が分離していった。しかし近年，社会学の研究では旧来の社会科学像の崩壊とも相まって，再びボランタリーな組織に研究の焦点が集まろうとしている。最近の社会学研究では，社会の法則や理論への志向性が急速に弱まっている。こうしたなかで，本論文の訳出が最近の社会学の変化に，いささかでも益するところがあればと祈念している。

藤田弘夫（慶應義塾大学文学部教授）